

安然の三昧耶戒説について

窪 田 哲 正

密教独自の戒律である三昧耶戒について、五大院安然（八四一—八八九）が如何なる説を唱えたかということ、彼の著作『観中院撰定事業灌頂式具足支分』（以下『具支灌頂』と略す）の所説を中心に若干の考察を加えてみたい。右書卷三

「摂受建立護持弟子支分」中には、「今抛義積及瞿醯文、於第六日護持建立弟子方便、有二十四法」として次の順序で三昧耶戒授受について論ずる。すなわち（一）素弁人物、（二）奉請供養、（三）説法開道、（四）教彼三婦、（五）懺悔先罪、（六）発菩提心、（七）運心供養、（八）授律儀戒（この中でさらに問遮、請師、羯磨授戒、戒相の問題が詳論される）以上である。ところで最初に問題とせねばならぬことは、右の（三）以下の順序が慈覚大師円仁以来もちいられた胎金各別の三昧耶戒儀の中の、胎藏界の授戒次第に則したものであり、また本書中に真言諸戒を論ずるに先だって、「大悲胎藏入曼荼羅之前有二十七種戒」と述べるこ

である。ならばこの『具支灌頂』所論の三昧耶戒説は胎藏界のそれであり、安然にはこれと別に金剛界の三昧耶戒説があったとも考えられる。現に安然の弟子玄静の胎の戒儀は『具支灌頂』の説を裏けているが、金の戒儀はこれと異なる内容である。しかし今はしばらくこの問題を措いて、本書を以て安然の三昧耶戒説を考えていくことにする。

さて安然は彼以前の入唐八家の将来になる十本の三昧耶戒儀を列挙し、それらの中で

（一）『無畏三藏最上乘受菩提心戒及心地秘訣』一行和上所記

（二）『無畏三藏受戒懺悔文及禪門要法』慧驚禪師所集の二本を「此中^{ナリ}最要^{ナリ}宜^{ナリ}用^{ナリ}彼文」と示す。この言葉にしたがうならば、安然の三昧耶戒説はこれら両戒儀に依拠するものということになる。ところが実際には安然の説はこれら二つの戒儀も含めて、従前の諸戒儀とは大きく内容を異にするのである。以下に具体的項目を順にみていくことにする。

二

(一) 問遮について。

安然是従前の諸戒儀を批判して次のようにいう。

諸戒儀中皆問七遮。而義釈中唯示四遮。如三昧耶四重禁中、第四云。此是四摂相違法。四摂は菩薩具戒中四依。初受戒時先当開示此遮難。

すなわち『禅要』等の諸戒儀が『梵網經』の説に基づいて、授戒に先だつて七遮を問うのに対し、安然是『具緣品義釈』の「四摂（布施、愛語、利他、同事）は是れ菩薩具戒中の四依なり、初めて受戒する時は先に当に此の遮難を開示すべし」の文に拠つて、四摂法の実行可否を問遮として問えというのである。この主張の援証のために『金剛頂義訣』と『法悦集陀羅尼經』が引かれるが、要するにそのいわんとする所は顯教に対する密教修業の優位性である。この密教の優位性の強調と顯教的要素の払拭とが本書に一貫して示される安然の三昧耶戒説の特色である。

(二) 請師について。

請師の問題でも同様の立場が示される。

諸戒儀中多用奉請釈迦文殊弥勒三尊。而普賢觀心地觀等是釈迦一化遣法。用此三尊。……今拠此文（方等陀羅尼行法）、真言行者受三十四尊者三摩耶戒之時、不必奉請釈迦等、而請二十

安然の三昧耶戒説について（窪田）

四菩薩形像。故知、今於白壇壇前、宜請壇中八位諸尊。

つまり三昧耶戒受戒に際し、従来の諸戒儀が『普賢觀』、『心地觀』等の説に拠つて、釈迦等の三尊を戒和尚等に勧請するのを、それは「釈迦一化遣法」、「応仏化儀」すなわち顯教応化身の説だとして否定するのである。三昧耶戒受戒に際しては毘盧遮那如来以下の壇中諸尊を勧請すべきだとするのである。

(三) 羯磨法について。

諸戒儀中皆受三聚淨戒羯磨。而其瓔珞亦是化身遣教戒法。今拠大日經文自有三世無障礙戒、捨自身奉獻諸尊。云云

諸戒儀所用の三聚羯磨はこれまた『瓔珞經』の「化身遣教戒法」であると否定する。代わりに何をもちいるべきかはこの箇所では不明だが、後段に『善生』、『戒壇図』等を引いて、「今真言門六戒一一白四羯磨乃應得戒」と述べる箇所があるから、安然是白四羯磨をもちうべきと考えていたことがわかる。

(四) 戒相について。

この三昧耶戒の戒相をめぐっては古來頗る錯綜した議論があったのであるが、これについては安然是次のようにいう。

諸戒儀中、或說四重不依本教、如下耳語三摩耶根本四重、為四重禁。或說十重不依本教、如下用禪要菩薩十重而未曾說十種方便學處。今拠方便學處品釈自有此教菩薩四重、不

捨三宝及菩提心是為四也。亦有十重……

諸戒儀が三昧耶戒の根本戒として『大日經』具緣品の三摩耶偈の四重禁戒を説示し、あるいはまた『禪要』の十重戒を載せるのに対し、安然是これらを「不依本教」として退ける。そしてこれらに代えて『学処品義釈』の四重、十重をもちいべきだと説くのである。

何よりもここで注目されるのは、安然が具緣品の四重（不捨正法、不捨離菩提心、不慳悋、不利衆生——『義釈』に「秘密藏中、四波羅夷」と釈す）よりも、『学処品義釈』の四重（不捨三宝及菩提心）を一段と高く位置づけることである。前者の四重も後者の四重と同様に「如出家菩薩四重禁」と一応はいわれるのではあるが、しかし『大日經』や『義釈』所説の諸戒を「真言門行菩薩」の受戒次第にあてはめて説明する箇所では

- ① 五戒十善——真言門行菩薩優婆塞優婆夷沙弥沙弥尼
- ② 三世無障礙智戒——真言門行菩薩式叉式叉摩尼
- ③ 四根本戒（学処品義釈の四重）——真言門行菩薩比丘比丘尼

④ 耳語一偈——僧祇六念有部五時之法

⑤ 三昧耶四根本重（具緣品三摩耶偈の四重）——受具後の説戒相

⑥ 十重——七衆共受

と位置づける。すなわち③の四重戒を受戒することによって

「名づけて真言門行菩薩比丘比丘尼と為す」とされるのである。ここに③の四重戒が最重要視されていることが示される。では安然は何故⑤でなく、③の方を重視したのであろうか。これについては幾つかの理由が考えられる。まず第一にうかぶのが空海戒儀との関係である。⑤の四重を戒儀に載せたのは空海の『秘密三昧耶仏戒儀』が最初であり、これは『禪要』等には無い空海戒儀の特色とされる。この空海の戒儀に対抗してことさら③を安然が強調した、ということが考えられる。第二に考えられるのは、これも右の第一の理由が背景にあったのかもしれないが、『義釈』に⑤の三摩耶偈四重を「略示戒相」と釈す文に安然がしがった、つまり「略示」の語によって⑤を③より低くみなしたのではないかということである。第三の理由は三昧耶戒受戒の意義、功德との関係である。安然是三昧耶戒受戒によって受者は一体三宝の境に入入すると説く。この一体三宝との関連から③の不捨三宝等の四重が真言門行菩薩の最重要戒とされたのではなかったか。以上のようなことが考えられる。第三の理由については東密の学者実詮（一六六三—一七四〇）も右の安然説を踏まえて同趣旨の論をなすから、全く見当はずれでもなからう。

三

これら一連の三昧耶戒授受の純真言化強調の主張の中で最

大かつ決定的なものが、純真言菩薩僧の存在の示唆であろう。つまり顯教の戒を受けない、始めから真言戒だけを受持する「直往」真言菩薩僧の主張である。安然是次のようにいう。

若是本成顯略七衆、今受真言門中諸戒、名為廻心真言七衆。

云云方等陀羅尼行法時、在家菩薩受持三衣針具、如比丘法。受於六重一如婆塞法。故知、出家菩薩受持真言戒、持三衣針具、名為比丘比丘尼也。

文中の「廻心真言七衆」の語は「直往」の語に對比してもちいられているのである。この説はいうまでもなく最澄の「回心向大」(『四条式』)の概念を踏まえているのであり、安然是これを大小相對から顯密相對の説へと転換し、不受顯戒の直往真言菩薩僧を第一義とする独自の修道論を示したのである。ただこのような説は、止観、遮那阿業學生ともに梵網大戒を受ける日本天台の教団原則を揺るがしかねないのであり、そのため安然是控え目に語ったのであろう。しかしこの安然説は後に、叡山に對抗して独自の戒壇、いわゆる三摩耶戒壇を建立せんとした園城寺衆徒の注目する所となり、その戒壇別置の理論的根拠とされた(『園城寺戒壇詰難答』)。故にその影響は大なるものがあるといえる。これについては別な機会にふれたい。

以上『具支灌頂』によって安然の三昧耶戒説の独自性をみ

安然の三昧耶戒説について(窪田)

てきたのであるが、ここで注目すべきは、この安然説の背景に一貫して天台の方等三昧行法の大きな影響がみられることである。懺悔(本稿ではふれず)、請師の問題にしても然り、また最後にふれた直往真言菩薩僧の存在可能性示唆についても、その根拠とされていたのは方等三昧行法であった。この四種三昧中の一つの密教的行法を根拠とする所に、天台の伝統を紹いだ台密僧安然の三昧耶戒説の特色をみることができる。

1 日藏八〇・五以下。『具支灌頂』引用頁数は略す。

2 その理由の第一は安然の金の戒説の資料を見出せぬこと、第二に本書の所説が胎金の分別にふれず、顯密相對を主眼とすること。また「金剛頂經説に依る」とされる『無畏禪要』等も議論の対象になっていることも理由の一つである。

3 (一)の『心地秘訣』は現存するというのも、従来研究、紹介のなされていない不明の書であった(大村『密教発達史』四四七頁、長部『一行禪師の研究』一四頁)、しかし東寺の杲宝がこの書と『禪要』とを「兩本大同少異也」(大正五九・一一二中)というから、本書は『禪要』の別行本だったことが知られる。

4 統藏一・三六・四・三五二。

5 玄靜の胎の戒儀参照(真言全二七・二四)。

6 『具支灌頂』所出の諸戒の典拠については杲宝の説(大正五九・一一七中)参照。

7 勝又『密教の日本的展開』八八頁。

(県立高校教諭)